子どもたちの命を守り育てたい　～保健室からの発信～

荒俣　寿生

子どもの命を守るために私ができること

子どもの命にかかわる重大な事件や事故が報道されるたびに、もしも、我が校の子どもにこのような緊急事態が起こってしまったら・・・という思いが私の頭をよぎる。養護教諭は、医学的知識をもち、緊急事態に対応できる能力を兼ね備えた学校唯一の教育職である。子どもの命を守る最前線を走る養護教諭として、日常の勤務の中で何ができるか、危機管理における学校組織の一員としてどのような役割を果たすべきなのかなどを、「命の教育」をすすめていく中で以前にも増して強く考えるようになった。

保健室の立場から考えると、「子どもの危機」には、二つあると考えている。

一つは「身体的な危機」である。救急疾患や事件・事故などの影響から、命が脅かされる事態のことである。

二つ目は「心理的な危機」である。子どもが、抱く心の葛藤から様々な問題行動をとってしまう事態のことである。

この二つの危機の被害を最小限に食い止め、事態を早急に改善していくためには、予防に重点においた取り組みが必要であると考える。それは、保健室だけの取り組みでは何も効果を出せない。教職員はもちろんのこと、子どもを支える家庭を巻き込み、それぞれの立場で子どもが出す危機的サインについて考えたり、支援の必要感を高めたりして、「子どもの危機」に対する意識を高め、それぞれができることから取り組んでいかなければならないと考える。

身体的な危機への備え

私の七つ道具入れ『ウエストポーチ』

保健室での救急処置は、簡単な処置で済むものから、救急車を要請しなければならないものまで多岐に及ぶ。命を左右する状態であればあるほど、学校現場での応急処置の重要性が叫ばれている。養護教諭が受ける研修会には、毎年必ず心肺蘇生などの一次救命処置や応急手当の講習会がある。心肺停止状態の子どもへの応急処置は、正確な心肺蘇生の技術だけが生存の確率を増やすと言われている。このことは、養護教諭の危機に対する意識の高さや行動が、子どもの身体的な危機を救えるかどうかに影響してくると考える。

【七つ道具の一部】

私は、養護教諭になって、１１年目になる。毎年心肺蘇生法などの研修を受けるたびに、いつ危機的状況が発生しても、適切な緊急対応が迅速に実践できるように準備態勢を整えておくことの必要性を感じてはいたものの、日常の勤務の中では十分に研修を生かしていなかった。そこで、今年度の研修会の折りに人工呼吸時に使用するマスクを購入した。最初は保健室に常備することを考えたが、緊急時に適切な対応を迅速に実践するためには常に身に付けておくことに意味があると考え、携帯電話や聴診器、体温計などと一緒に緊急時の七つ道具として、ウエストポーチに入れることにした。そし

て、そのウエストポーチを出勤と同時に身に付け、下校まで外すことなく仕事を続けている。

子どもたちから、「先生、そのバックの中に何が入っているの？」という質問をよく受ける。「みんなの命を守るための道具が入っているんだよ。人工呼吸をするマスクとかね、心臓が動いているかどうか、心臓の音を聴く聴診器とかね・・・」と返すと、「へ～知らんかった。ありがとう」と満面の笑顔を返してくれた。『自分の命を懸命になって守ってくれる大人がいる』そんな姿を見せることが、子どもたちの命を大切にする心をはぐくむ要素の一つになっていってほしいと願いつつ、「守られている」という安心感を子どもに与えていきたいと思う。

心理的な危機への備え

自己肯定感が子どもの人生を支える

人生には避けて通れない様々な逆境がある。子どもだからといって、その逆境から逃れることは決してできない。例えば、学校生活では、友達や先生とのトラブルやテストなどといった逆境が考えられる。また、家庭生活では、家庭内不和、親の離婚、親からの虐待などの、子どもの力ではどうすることもできない逆境に出会うこともあるかもしれない。しかし、今の時代、たとえどんな逆境が自分にふりかかってきても、最後には自分の力で様々な出来事を乗り越えていく心の強さが必要なのではないかと考える。そのことが、自分の命、そして他人の命を大切にする心をはぐくんでくれるのではないかと考える。

私は、この逆境に打ち克つための力は、自己肯定感によって培われると考えている。小学校時代は、一生において一番自己肯定感を高めることができる時期である。この時期に、「私って、なかなかがんばり屋だ」「ぼくは、みんなの役に立っているんだ」と感じる経験をたくさん積ませたい。この自己肯定感が、その後の人生に何があっても、子どもたちの支えになってくれる。だからこそ、たくさんの「うれしい、よかった、がんばれた」という生きるパワーになるだろう体験が子どもの心に刻まれてほしいと願っている。そして、その役割は、子どもたちを育てる立場である保護者や教職員にあることを私たちは認識していかなければいけないと思う。

子どもが一度も経験したことがない逆境に出会えば、必ず心理的な危機が訪れる。子どもたちを育てる立場である者には、それを乗り越えさせる義務があるように思う。しかし、どのように子どもと向き合えばよいのか、どのようなかかわりをもてばよいのか、保護者も教職員も確かな答えをもっている人など誰もいないだろうと思う。だからこそ、お互い手を取り合い、子どもたちを見守っていかなければならないと考える。

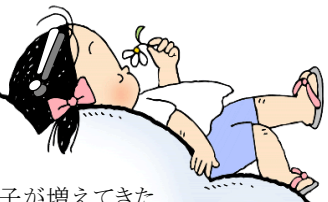
お母さんとの面談から

『心にゆとりをもって、お子さんと接してくださいね』という言葉をよく聞きました。でも、私は、具体的にどのようにかかわっていけばよいのか、分かりませんでした。周囲に飛び交う情報や、いろいろな子どもたちと接する中で、我が子の将来に不安を感じながら、我が子に足りないところを、子育てという暗闇の中、手探り状態で一生懸命してきました。でも、どんなにがんばっても、子どもは私の思いとは逆方向に向いていき、私一人が空回りしているようでした。

保健だよりを通して保護者と共に子どもを見つめる

子どもの心理的な危機の備えの１つの手段として保健だよりを活用している。保健だよりには、保健室で出会った、逆境にもめげずに様々な出来事を乗り超える強い力を感じる子や、逆境に押しつぶされ自分を失い、心の危機のサインである問題行動を起こしている子の二つのタイプの子どもについてのエピソードを載せている。その子どもたちの姿から、まっすぐで一生懸命な、命あふれる様々な思いを感じとってほしい、それを受け止め見守ってあげてほしいという願いのもと発信している。また、保健だよりが子どもを見つめるときの学校と家庭の共通の手がかりとなってくれればとも考えている。私は、これからも子どもたちの命が輝き、自己肯定感を高めるために、保護者と共に子どもを見つめることができる保健だよりを発信し続けていきたい。

＜平成18年度11月号の保健だよりより＞



みんな大好き！！

“家族が一番の特効薬”

かぜなどの症状を訴え、保健室に来室する子が増えてきた。
この時期、病気の子供が増えるのは心配だが、
わたしには、楽しみがある。
それは、早退時の家族ドラマに出会うことができるからである。
ここで、心に残る感動ドラマを紹介したい。

発熱のため来室したＡさん。「この熱だと早退だね‥」と話すと、
「早退したくない！」とほっぺを真っ赤にしながら大粒の涙を流した。
「どうして･･･？お母さんに連絡しないの‥？」と何回も問いかけるが、
「連絡しないで！！」と、布団の中にもぐりこんでしまった。
「理由を話してよ。このままの熱で帰さなかったら、お母さんに申し訳ないよ」
「お母さん、仕事が忙しくてね。」
「人のお世話するお仕事で、迷惑をかけられないから迎えに来れないの。」
ヒックヒック泣きながら、話してくれた。
私には、Ａさんの“お母さんを悲しませたくない”という気持ちや
“お母さんに迷惑をかけたくない”という気持ちが痛いほど伝わってきた。
「お母さんに、連絡がついたよ」と担任の先生から連絡があり、やっと、にっこり。
本当は、大好きなお母さんに迎えに来てもらいたかったんだね。

そして、お母さんが迎えにいらっしゃると、
緊張の糸がきれたように涙があふれてきた。
私は、どんなによく効くお薬よりも、
『家族の愛情や温かさ』という特効薬には、かなわないなあと、
子供の様子を見て、優しい気持ちにさせられた。

保護者から寄せられた感想

私が保健だよりの中で一番印象深かったのが、発熱して早退する時に母親の仕事を心配して勤務先に電話するのを拒んでいた子の話です。熱で苦しくて一番そばにいてほしいはずなのに・・・と、その子の気持ちを考えると心がジーンとなり涙が出ました。私も仕事で忙しいことを日ごろから子どもたちに話しています。それは、親の働いている姿を子どもに見せ、その日のあった大変だったことや順調にいったことなどを話して、子どもにも同じように学校や友達の話をしてほしいと思っているからです。でも、１１月号を読んで、「ママは仕事があるけれど、一番大切なのはあなたたちだから、いつでもとんで来るからね」と改めて話しました。

＜平成18年度6月号の保健だよりより＞

保健室で出会ったこころにズシンときた言葉

「先生、私･･･こんな自分が一番いやなの。」

友達とのちょっとしたトラブルや、しかられる場面や不安定な気持ちになる場面などで、突然「きれて」怒りに支配され、衝動的に暴力をふるったり、暴言を吐いたり、行動が止まったり、長時間泣き続けたりする『怒りをコントロールできない子供』に出会うことがあります。怒りを向けられた人もつらいかもしれませんが、怒りをコントロールできない子供は、自己嫌悪と罪悪感に苦しんでいるのです。

『子供の感情の発達について』 ～子供の負の気持ちや感情にも向き合い、受け止めよう～

東京学芸大学心理学学科　臨床心理士 大河原美以先生の講話から

感情の発達は、生まれてから現在までの体験とそれに対してどのようにまわりがかかわってきたかという体験の積み重ねによって、構成されていきます。例えば、乳幼児の頃、全身で負の感情（不安・怒り・悲しみなど）を表現します。親がその思いを察し、いろいろな言葉がけをしますね。そうすることで、子供は、「こんな感情の時は、この言葉。」というふうに感情と言葉をつなげ、社会的に共通している感情へと育てていきます。ところが、親が「よい子」に育てたいと思えば思うほど、また、子供がぐずぐずして親の言うことを聞かないと、このまま悪い子になってしまうのではないかと、とても不安になり、厳しく「しつけ」なければというあせりを感じてしまうことがあります。そのような関係の中で育ってくると、負の感情が社会的に認められる感情として発達するチャンスが失われていくことになります。

子供は、お父さんお母さんが大好きです。だから、無意識に親が望まない負の感情は感じないようにして、親が望んでいる正の感情（にこにこ、元気で、素直、やる気いっぱい）のみを表に出すようになります。親の前で、『負の感情』を全身で表現できる子供は、いつも自分の存在が丸ごと愛されているという確信を思っている子だといえます。保健室では、「負の感情」が思いっきり出せるような関係になれるように日々努力しています。

保護者から寄せられた感想

６・７月号の「子どもの感情の発達について」は、とても共感しました。感情の発達がうまくいかない理由の一つに「家族の病気」があるのを知りました。我が家では家族の病気が相次ぎ、「みんなが病気になるのは自分のせいだ」と私自身を責めるようになりました。子どももいっぱいいっぱいの私の姿を見て我慢していたと思います。私と同じつらさを幼くして体験させてしまったのかと気付いた時、とても申し訳ない気持ちになりました。私は、今まで心の余裕が全くありませんでした。でも、これからは、少しでも子どもの気持ちと共感し合い、ゆとりをもって育児をしていきたいです。そして、自分の子どもが育児をする時には、今の自分の心のゆとりがいい形でつながっていってほしいと心から願っています。